



# うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

第41号

発行日:平成26年7月7日

編集発行:魚津埋没林博物館

印刷:魚津印刷(株)

## ナウマンゾウとオオツノジカ



埋没林博物館のナウマンゾウとオオツノジカのレプリカ

約20万年前にアフリカで誕生した我々の祖先である現生人類(ホモ・サピエンス)がアジアに進出し、日本列島に渡ってきたのが約4万年前と考えられています。その頃の日本列島にはゾウの仲間である長鼻類やオオツノジカ、ヘラジカなどの大型動物が生息していました。富山平野でもナウマンゾウの化石が出土しており、狩猟生活をおくっていた後期旧石器時代(4万年前～1万5千年前)の人々にとって大型動物が繁殖する島々はこのうえもなく魅力的な大地に映ったことでしょう。長野県野尻湖のナウマンゾウやオオツノジカの化石出土地からは化石と一緒に旧石器人が使った石や骨で作った道具(石器、骨器)も出土しています。

体重が4tにも達するナウマンゾウ1頭をしとめると、50人の村人が1ヶ月間食べることができる食糧になる、という試算もあります。

## 大型動物の絶滅

館長 麻柄 一志

魚津埋没林博物館のテーマ館1階にナウマンゾウとオオツノジカのレプリカが展示してある。埋没林の見学者の中には「何故ここに象がいるのか?」と怪訝な顔をされる方がいる。ナウマンゾウは約2万数千年前に、オオツノジカは約1万数千年前に日本列島では絶滅している。この2種は後期更新世(12万6千年～1万2千年前)末の日本列島における大型動物絶滅の象徴といえる。

魚津埋没林は過去の温暖化が引き起こした海水面の上昇によって水没したと考えられている。埋没林博物館の意義の一つは、過去における環境変化を示し、一人一人が環境問題について考える場としての存在である。環境の変化はそこに生きる生物たちに大きな影響を与えてきた。富山平野にはかつてナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物が生息していたが、こうした動物が何故、絶滅してしまったのかを考えることは、現在の我々を取り巻く環境問題を解く鍵になるかもしれない。

### 富山平野のナウマンゾウ

ナウマンゾウは30数万年前には中国から渡来しており、最終間氷期である12～7万年前に最も繁殖したようで北海道南部へも進出している。背の高さ約2.5～3m、牙の長さが雄では2mを超えるナウマンゾウは後期更新世の日本列島では北海道に生息していた同じ長鼻属のマンモスと並び、最大の哺乳類であった。列島ではこれまで九州から北海道まで200数十ヵ所からナウマンゾウの化石が出土している。またナウマンゾウの可能性のある足跡化石も発見されている。富山平野

では富山市(旧大沢野町)長川原と南砺市(旧平村)祖山からナウマンゾウの臼歯の出土が知られている。

長川原のナウマンゾウ臼歯は1978年に神通川左岸の土取工事現場で発見されたもので魚津埋没林の研究で知られる藤井昭二富山大学名誉教授が調査し、地質学雑誌に発表している。出土した化石は同一固体と考えられる下顎左右の第3大臼歯と上顎の大臼歯である。化石を包含する泥層の上位の黒色泥層の木材の放射性炭素年代は31,540年より古い年代を示しており、このナウマンゾウ化石もこれより古いことを示している。

国立科学博物館に所蔵されている祖山出土のナウマンゾウ化石も大臼歯であるが、その発見は江戸時代末期で、出土層などの詳細は不明である。この化石は1924年頃まで東京帝室博物館(現東京国立博物館)が所蔵していたが、後に国立科学博物館の前身である東京教育博物館に移管されている。発見から博物館に所蔵されるまでの経緯などは明らかでない。



富山市長川原出土のナウマンゾウ臼歯(富山市科学博物館蔵)

2ヶ所の化石出土地は神通川と庄川という岐阜県に源を発し、日本海へ注ぐ大河川沿いである。ゾウは川筋に沿って移動するといわれており、これらの化石も日本海と飛騨地域、さらに太平洋側まで足を伸ばしていた可能性がある。ナウマンゾウが生息していた時期の後期旧石器時代前葉(4万年～3万年前)の遺跡は富山平野でも数多く発見されている。特に神通川や庄川・小矢部川の川筋に旧石器人が生活していた痕跡が多く、河川を移動するナウマンゾウなどの大型動物を狙っていたのかもしれない。

### ナウマンゾウの絶滅

日本列島から出土するナウマンゾウの最も新しい化石は約27,500年前のものである。この後ナウマンゾウは日本列島で絶滅したと考えられている。ナウマンゾウだけでなく、この前後に多くの大型や中型動物が本州島から相次いで消えている。この絶滅はなぜ起こったのか様々な説があるが、大きく分けて二つの原因が考えられている。

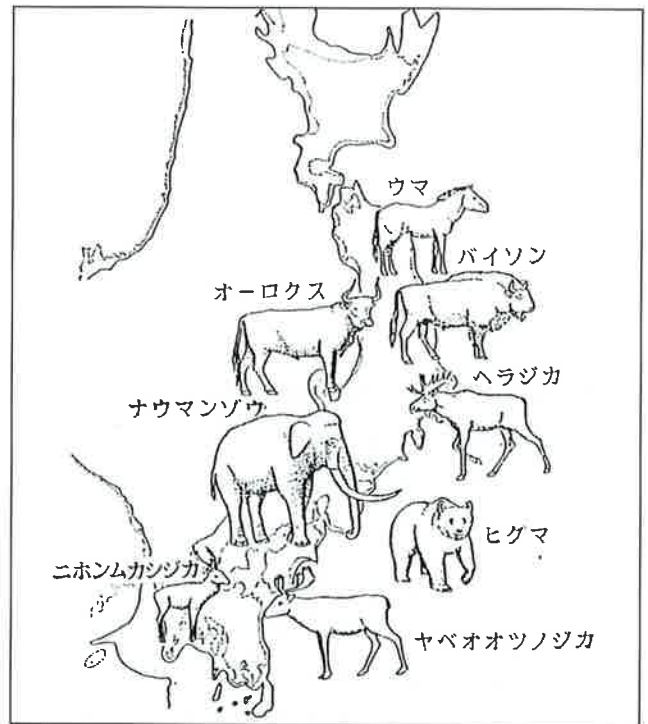
#### 1. 人間による過剰殺戮(オーバーキル)

過剰殺戮説では我々の列島に住んでいた旧石器人が、食糧であったナウマンゾウやオオツノジカなどの大型、中型動物を乱獲したため、大量絶滅がおこったとする。

確かに、ナウマンゾウやオオツノジカの化石が出土する長野県野尻湖底遺跡や岩手県一関市花泉遺跡ではこうした化石とともに、旧石器時代人が使った石器や骨器(狩猟具・解体具)などが一緒に出土している。さらに野尻湖周辺では湖を取り巻くように旧石器時代の遺跡が密集しており、動物の水場をねらった人類の生活の跡と考えられている。しかし、こうした狩猟活動がナウマンゾウなどの絶滅につながった明確な証拠はない。

#### 2. 環境変化(寒冷化)

後期更新世の終わり頃の約3万年から急速に気候は寒冷化に向かう。2万数千年前の最寒冷期には年平均気温は現在より8℃ほど低かったといわれており、こうした急激な寒冷化に適応できなかった大型動物などが絶滅したと考えられている。



3万年前の本州島の大型動物(河村善也1985)

しかし、絶滅時期が最寒冷期と一致しない動物もあり、また約15万年前のリス氷期の最寒冷期を生き延びたナウマンゾウなどが何故最終氷期に適応できなかったかの説明ができないなどの問題点も指摘されている。

おそらく、日本列島における後期更新世の大量絶滅は気候変動と人類の関与など複合的な原因によるものと思われるが、人類の拡散と繁殖は列島の生態系にこれまでにない圧力を加えたことであろう。

#### 後期更新世の列島の動物

約4～2万年前の岩手県花泉遺跡からはヤギウ、オーロックス(原牛)、バイソンの一種である



ハナイズミモリウシ、ヘラジカ、オオツノジカ、ナウマンゾウなどの化石骨が多量に出土している。さらに現在でも列島に生息しているニホンジカ、イノシシ、アナグマ、ノウサギなどの化石も存在する。比較的大きな動物だけが絶滅し、中型・小型動物は現在まで生きながらえたようだ。このほかに本州島ではヒグマの化石も出土している。地球上から絶滅したナウマンゾウ、オオツノジカ、ニホンムカシジカやオーロックスなどのほか、現在では亜寒帯や冷

温帯に生息するヒグマやヘラジカが当時の本州にも生息しており、日本列島の自然は現在我々が見慣れた景観ではなく針葉樹林が卓越した植物相にこうした大型・中型の動物が闊歩していたと考えられている。この時期の北海道にはマンモスがサハリン経由で大陸から南下しており、マンモスを追ってシベリアから北海道へやって来た人々もいた。マンモスの絶滅についても人為説と環境変化説がある。

## シリーズ

### 埋没林の仲間たち ④ ムラサキシキブ属 (シソ科)



ムラサキシキブの花

およそ1000年前に書かれ、その後の日本文学に大きな影響を与えた超大作『源氏物語』。その作者の名をいただいたムラサキシキブは、秋に熟す果実が美しく人気の高い樹木です。色鮮やかな果実は鳥の目を引き、食べられることで遠くまで種子を運んでもらう意味があります。

ムラサキシキブの果実の鮮やかな紫色は他の樹木にはちょっと見られない色で、鑑賞用に庭や公園などに



ムラサキシキブの果実

も植えられます。ただ、観賞用にはよく似た別種のコムラサキの方が多く植えられています。これらの果実に毒はないようですが、食用にされるという話も聞きません。

\* \* \*

魚津埋没林の1989年の調査で、ムラサキシキブ属の種子が出土しています。現在の魚津市内では、ムラサキシキブが丘陵地帯から山地までごく普通に生育しています。

#### ご利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
- 休館日 年末年始(12月29日～1月1日)
- 入館料 ・大人(高校生以上)…520円 ・小中学生…260円
- 交通 ・JR北陸本線魚津駅 } 下車1.5km (タクシー…5分)
- ・富山地方鉄道新魚津駅 } 徒歩…25分)
- ・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

#### 特別天然記念物 魚津埋没林博物館

〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765) 22-1049  
ホームページ <http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/>  
e-mail [nekkolnd@city.uozu.toyama.jp](mailto:nekkolnd@city.uozu.toyama.jp)

